

〔二〇一八年 愛知県立大学日本文学部シンポジウム「連動するアジア・日本・愛知—アジア太平洋戦争と知識人—」  
関連企画「日本近代文学と台湾—頼雲莊先生との対話」基調報告〕

# 日本語教育の一環としての日本文学

——台湾の教室で読む日本近代小説——

台湾・東呉大学日語文学科 頼 雲 莊

## 一、はじめに

本稿は、東呉大学日語文学科における日本語文学教育について紹介し、さらに三年次の「日本小説選読」という授業を中心に、その実施状況を報告するものである。シラバスでは、「日本小説選読」の教育目標は、「学習者の文章の読解、翻訳、分析能力を向上させること」、また、文学作品を読むことを通して「日本人の考え方、日本社会、日本文化についての理解を深めること」とを掲げている。つまりこの授業は、日本語教育であると同時に文学または文化理解の教育として位置づけられているのである。

近年、実用性を重視する外国語教育という大きな流れの中で、日本文学教育が衰退し、周縁化されつつあることは否めない事実である。学習者によっては、文学を勉強するより、実用的な「翻訳技能」や「商業知識」をさらに身につけたいという声もある。実際、本学科では、二〇一八年度から「日本小説選読」という必修科目が選択科目になり、その代わりに「日中翻訳実務」という科目が必修になった。時代のニーズに沿って変化していくことはいいことであるが、文学こそ外国語学習者にとって欠かせない養分であることは、忘れてはならないことだと思われる。

本稿においては、日語文学科の三年生を対象にした二〇一六年度の日本近代文学についての教育の実施状況について説明し、その

実践過程を報告する。

## 二、日本語教育の一環としての日本文学

東呉大学日本語文学科では、「日本語に精通し、日本についての理解を深め、国際的視野に立つて中日文化交流のできる人材の育成を主な目的」としている。履修科目には「日本語に関する基礎的なもの他に、日本語研究・日本文学・日本文化・日本現代事情など専門的な科目に加えて、日本語翻訳・日本語通訳・日本語文書資料処理・インターネットの活用などの実務的な科目」もある。それぞれの学年では主として日本語の授業が中心に行われているが、同時に日本学に関連する授業もデザインされている。たとえば、二年次からは「日本の歴史」「日本の地理」「日本故事選読」（昔話・童話）というような選択科目があるようになる。日本語だけではなく、日本に関係する諸学問、諸技能も教育の一環とされている。その中でも、日本学についての授業は重要な役割を果たしてきた。学年ごとに紹介していくと、「日本故事選読」（二年）、「日本小説選読」（三年）、「日本近代文学史」（三年）、「日本古典文学」（四年）、「日本古典文学史」（四年）、「日本名著選読」（四年）がある。一年次を除いてそれぞれの学年で、文学関係の授業があることがわ

表1 日本文学関係の科目

年次	科目名	2017年度まで	単位	2018年度	単位
2	日本故事選読	選択（通年）	4	選択（通年）	4
3	日本小説選読	必修（通年）	4	選択（通年）	4
3	日本近代文学史	選択（通年）	4	選択（前期）	2
4	日本古典文学史	選択（通年）	4	選択（後期）	2
4	日本古典文学	選択（通年）	4	選択（通年）	4
4	日本名著選読	選択（通年）	4	選択（通年）	4

る。このように、将来、高度な日本語を操り日台の架け橋になることが期待される日本語文学科の卒業生が、言語の知恵の結晶を摂取せずにそのまま卒業していくようなことになれば、物足りないところがあるように思われる。

さて、実際文学関係の授業がどのように行われてきたかを、次節

かる。「日本小説選読」だけが必修科目で、ほかは選択科目である。しかし、カリキュラムの改正で、二〇一八年度からすべての文学の授業が選択科目になった。それと同時に時間数も減らされた。表1で示す通り、日本文学関係の科目の総単位数は減らされている。

このように見ていくと、現在（二〇一八年度）では二年次から四年次まで日本文学関係の授業が行われてはいるが、すべて選択科目であるため、四年間、日本の文学に全く接触せずに卒業していく学生がいてもおかしくないことになる。

で二〇一六年に行った「日本小説選読」の授業内容を取り上げ、説明していきたい。

### 三、「日本小説選読」の授業内容

日本語教育であると同時に文学または文化理解の教育として位置づけられている「日本小説選読」という授業の受講者である三年次の学生には、学習者の日本文学に対する予備知識として次にあげるようなものが期待される。

1. 二年次の選択科目「日本故事選読」
2. 高校の国文（中文）教科書での日本文学の中国語訳（例えば、芥川龍之介「藪の中」）
3. 中国語訳された現代作家の作品。例えば、村上春樹、宮部みゆき、東野圭吾など
4. アニメ、漫画、ゲームなどのサブカルチャー

このように多かれ少なかれ、日本の文学についての予備知識を持っている学習者が多い。また、大学三年生の学習者の多くは、日本語学習歴二年ということになる。このレベルの学習者にだけだの長文を読ませればいいのかは、しばしば指導者の頭を悩ませる。理解しにくい、難しい言葉遣いや修辞が使われる、また難しい文学

の手法が行われている文学作品を選んだ場合は、学習者が文学を敬遠してしまう可能性もある。

今までの「日本小説選読」の授業では、芥川龍之介や太宰治、志賀直哉など、すでに「正典」（カノン）として認められた作品を主として取り上げて来た。それによって日本文学が好きになった学習者もいたが、一方で、「文学は難しい」「内容がわかりにくい」「つまらない」といった声もあった。そうした反応を避けるためにいろいろな工夫を行ってきた。教材選定のために、府川源一郎の「読み手に「教訓」を与えるというような観点からではなく、読み手の問題意識をかき立て、想像力をはばたかせてくれるような作品を選択する必要がある。また、現代を生きる私たちの抱えている様々な問題に切り込み、それを一人の人間として深く考えるきっかけを与えてくれるような作品が必要である」という見解は、大変参考になった。学習者に多くのことを考えさせるということを中心に、「日本小説選読」の教材を決めることにした。

二〇一六年度に実際に授業で取り上げたテキストは次の通りである。

前期（十八週間）

多和田葉子「不死の鳥」

村上春樹「鏡」

芥川龍之介「トロッコ」

太宰治「走れメロス」

葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」

志賀直哉「清兵衛と瓢箪」

後期（十八週間）

志賀直哉「小僧の神様」

宮沢賢治「雨ニモ負ケズ」

宮沢賢治「注文の多い料理店」

梶井基次郎「檸檬」

江戸川乱歩「人間椅子」

芥川龍之介「羅生門」

台湾の大学の学年は、前期（九月～一月）と後期（二月～六月）

に分かれており、それぞれ十八週間で、合わせて三十六週間という授業期間がある。一見、関連性のない作品の羅列のように見えるが、実はその中にいくつか工夫を凝らしている。

まず、このような授業のアレンジメントは、前述の通り十八週間であり、それに本学では九週目に中間試験が実施されることを考慮に入れる。また、前半と後半の分量のバランスが取れるようにという衡量も反映されている。前期では、現代小説を導入し、なるべく言葉遣いの比較的簡単な作品を選んだ。前期と後期の間に一か月ほ

どの冬休み（一月下旬から二月下旬）が挟まれるため、志賀直哉の二つの短編作品について一緒に考えてみようという宿題を学習者に与えている。本稿ではさし当たって前期に扱った作品についてのみ説明することにする。

最初の多和田葉子「不死の鳥」については後で詳しく説明するが、二作目の作者の村上春樹は台湾ではだれもが知っている日本人作家であると思われる。本屋へ行けば、村上春樹文学の中文訳が平積みされている。しかし、その名声とは裏腹に実際作品を手にとって読んだという台湾の大学生は意外と少なかった。この授業での取り組みのように、すぐ読める短編を一つ選び精読することは、今後、これまで触れることの少なかった村上春樹文学を読む契機になるのではないかと思われる。

また、三作目の「トロッコ」の作者芥川龍之介は、一部の学習者にとっては、すでに高校の教科書によって勉強したことのある日本人作家である。川口浩史監督は「トロッコ」をモチーフに、映画『トロッコ』(Rain Truck, 二〇〇九年)を制作し、台湾の花蓮県をそのロケ地とした。少年の不安を考えると同時に、台湾と日本との関係を考えさせるきっかけとなり、取り上げることになった。

四作目に入る頃は学期の半分を過ぎたところだが、「走れメロス」という少々長めの短編を取り上げた。精読してそれぞれの登場

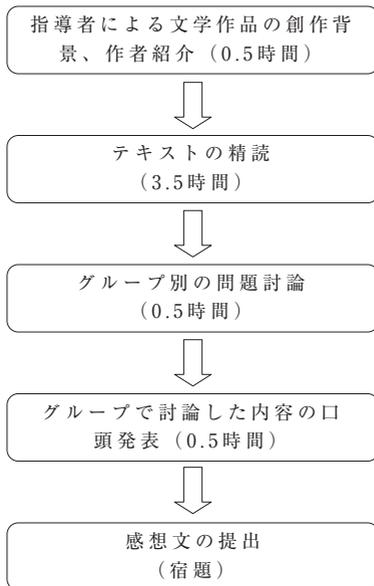
人物の性格を見ていき、「走れメロス」の主題について討論していく。学習者の多くは、メロスと竹馬の友との友情に感動したというより、むしろメロスの走れないときの言い訳めいた心中が繰り返される内容に、うんざりしたようである。ちなみに「走れメロス」においては、オノマトベがたくさん使われており、場面を通しての擬声擬態語の習得には、非常に効果的であることを付記したい。

やや長めの「走れメロス」の次は、短くてすぐに読めるような作品として、葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」を選んだ。昭和初期の、プロレタリア文学が流行っていた時代背景や社会状況を説明した上で作品を読んでいく。さらに、二十一世紀の現在の日本社会と台湾社会の状況と照らし合わせ、労働条件、また低賃金問題などについても提起し、身近なテーマとして学習者に作品内容について考えさせる。同時にはかのプロレタリア文学も学習者に推薦する。

気持ちちが重くなる「セメント樽の中の手紙」を読んで、最後に「清兵衛と瓢箪」を取り上げ、作品の内容を基に親子の葛藤について考えていく。このように前期で扱う作品はどれも意図的に学習者の身辺の問題と関連あるものを取り上げており、関心を引きやすいテーマであることが分かる。次節では、本授業で最初に取り上げた「不死の島」を例に授業の進行の様子を説明する。

#### 四、多和田葉子「不死の島」

本授業の最初の作品として、現代文学作家の多和田葉子の「不死の島」（二〇一二年）を取り上げることにした。多和田葉子「不死の島」を扱う授業時間は、三週間（週一回の授業は一〇〇分、計五時間）と予定をしている。その流れと時間分配は次の通りである。



「不死の島」は「近未来小説」で、三・一一以降、放射線の影響で老人が死ななくなり、それに加えて、若者も年齢の若い順から死んでいくという内容の話である。二〇一一年三月一日の東日本大

震災発生後、台湾のメディアはほぼリアルタイムで地震・津波・原子力発電所の破壊状況を台湾の国民に伝えた。事故発生以来、今日に至るまで長い間注目されてきたテーマである。日本と同じ島国の台湾でも原発問題についてはたくさんの議論がなされてきた。万が一、原子力発電所が地震や津波の被害にあつたらどう対応すればいいか、という国民の懸念から、原発廃止の声をよく耳にする。しかし、これは実際には容易に解決される問題ではない。このように、だれもが関心をよせているテーマに関連する小説であれば、学習者の興味を引くであろうと思いい、それを最初の作品にした。授業の展開について、以下詳しく説明する。

この授業は講義型の授業で、主として教師による講義を行う。それぞれの小説の内容によって、グループ別の討論・発表や、個人発表、感想文の提出などの教室活動を行っている。

まず手始めに、テキストの精読から始めるが、三年次の学習者にとって難しい単語や言い回しを取り上げ、文章の読解を深めていく。言語レベルの問題をクリアしてから、テキスト本文についての説明を施す。

二〇一五年四月八日、多和田葉子は台湾の淡江大学で自作の『献灯使』について講演し、その中の一篇「不死の島」についても言及した。この「不死の島」が「近未来小説」であることは既に述べ

た。「近未来小説」とは何かを学習者に説明するために、映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー PART2」（一九八九年）を例として挙げ、映画でもよく使われる手法であることを説明する。一九八九年の映画であるが、二〇一五年の未来の話をするという点は、「不死の島」の設定と共通している。

例えば、二〇一六年の時点で行われる授業では、次のような「近未来小説」としての時間設定について説明を行い、学習者の注意を促す。

「日本」と聞くと二〇一一年には同情されたものだが二〇一七年以降は差別されるようになった。(190頁)

本授業は二〇一六年九月から一〇月にかけて行われたもので、学習者の混乱を引き起こさないように丁寧にそれぞれの時間軸を説明していく。そのほかに、「不死の島」においては二〇一三年に「突然、北朝鮮から過激な反核運動が起こり、それがきっかけで韓国と北朝鮮は統一した」(194頁)、という叙述がある。現実の時間軸上では、二〇一六年の時点でこのようなことは起こらなかったため、混乱しないように、学習者に説明を行う。

ついで以下のように、大きく四つのテーマに分けてそれに該当する本文引用を挙げ、学習者に討論させている。主として学習者に問いを投げかける形で情報やヒントなどを与えるが、固定された答え

を与えないことを原則としている。

## 1. 天皇、皇室

「不死の島」において、天皇が国民に話をするという叙述がある。天皇が国民に話すということはどのような情景なのか。また、天皇の代わりに出てくるのは、「黒い覆面」の男で、その覆面はどのような意味があるか。

大地震からちょうど二年経った日に生放送で天皇陛下のお話があるということで、ホテルの休憩室のテレビの前には従業員や泊まり客が群がり、落ち着かない表情で放送を待っていた。

(中略)ところがそのあと現れたのは予想していた御顔ではなく、黒い覆面をした男だった。(192頁)

さらに、皇室の住居についてであるが、「京都御所」は皇居が東京に移される前の天皇の住居である。皇室の方々がそこに「幽閉される」とは何を象徴しているであろうか。

大震災に備えて、という名目でその年、皇室の方々は京都御所に移り、それ以来、残念なことにもうお言葉を聞くことはできなくなつた。家族全員で幽閉されている、という噂もあつた。(193頁)

台湾では天皇に相当する存在はいないが、戦後の日本の天皇とは

どのような存在なのかを考えてもらう。日本文化における天皇、そしてこの作品における天皇に関わる描写の意味するものについて考えを深めさせる。

## 2. 「不死」とは

多和田葉子は「不死の島」の「不死」について、次のように述べている。

「ゲイシャ・フジヤマのフジは「富士」だけれど、太平洋の隅っこで大陸に身を寄せる美しい列島が「不治」ではなく「無事」であることを願い、できれば「不死」であってほしいとさえ思いつながら書いた。<sup>注</sup>

このように、「不死」という言葉は「富士」「不治」「無事」といった三つの発音の近い言葉を連想させる。このように「掛けことば」を使用し、一語に複数の意味をもたせる技法は、日本文学の古典以来の修辞上の技法であることを説明する。このような技法を使用することで、どのような効果があるのか。ここでの「不死」とはどのような意味があるのか。中国では古来、皇帝は常に不老不死の方法を追求してきたが、誰もが死からは逃れられなかった。もし人間が「不死」になれるようになったならば、この世界はどのような世界になるのだろうか。

二〇一一年、福島で被曝した当時、百歳を越えていた人たちはみな今も健在で、幸いにしてこれまで一人も亡くなっていない。(中略) 若返ったのではなく、どうやら死ぬ能力を放射性物質によって奪われてしまったようなのである。(196頁)

地震という天然災害による原子力発電所のメルトダウンで、被曝者が数多くいる。その想定外の災害で、人間が古来求め続けてきた「不死」が可能になった。この「不死」が果たして人間に幸福をもたらしたのか。それとももつと大きな不幸をもたらしたのか。それだけではなく、「若さ」ということばの意味さえも反転させていくのであれば、世界はどのようなようになっていくのであろうか。

### 3. 「若さ」とは

「若さ」とは老いと相対する概念であるが、作中で「若い」「若い人」とはどのような意味があるのか。老人が若い人の面倒を見、介護をするというのはどのような世界なのかを問いとして投げ掛け、考えることを促した。

二〇一一年に子供だった人たちは次々病気になる、働くことができないだけでなく、介護が必要なのだ。(中略) だから若ければ若いほど危険なのだ。(196頁)

若いという形容詞に若さがあった時代は終わり、若いと言え

ば、立てない、歩けない、眼が見えない、ものがたべられない、しゃべれない、という意味になってしまった。「永遠の青春」がこれほどつらいものだとは前世紀までは誰も予想していなかった。(197頁)

老人たちは若い人の看護をし、家族の食べ物を確保するだけで精一杯で、嘆く力も怒る力もない。(中略) 悲しみも苦しきも形にないまま老人たちの心に蓄積していく。いくら一所懸命に介護しても、若い人から順に姿を消していく。(197頁)

「不死」とは、すべての人の死なないことを意味するのではなく、老人だけが「不死」なのである。若い人は死んでいく。老人が若い人の面倒を見、社会の働き手となることでどのような社会になっていくのであろうか。若い人が死んでいくことは悲しいことだけれども、生きている人はますます責任が重くなっていく。

### 4. 植民、被植民、デフォルメされた江戸時代

かつて台湾は、五〇年間の植民地時代(一八九五年〜一九四五年)を経験してきた。植民の支配と被支配の関係はどのようなものなのかを考えてもらおう。

女も男も裸足に草履をはき、手脚の肌を剥き出しにして、通勤通学するようになった。家の中では真っ裸で過ごす。これで

は文明人ではないと思われ、植民地化されてしまう危険が出てきそうだが、日本へは外国の船などもう、やって来ない。白い船も黒い船も来ない。(198頁)

「文明」と「植民地化」の關係について考えを深めさせる。植民地のほかにも、学習者はすでに「日本の歴史」という授業で、江戸時代の開国を促した「黒船」のことを理解している。島国の日本に船が寄らないとは、鎖国と同じ状況に戻っていくことなのではないかと思われる。しかし、今回は自主的に鎖国するのではなく、原発事故でほかの国からの交流が絶えたのである。

縁側で碁や将棋を楽しむ人たち。長い夜をテレビなしに過ごすには本を読むしかないが、日没とともに停電になるので、語り部が現れ、街角で昔の漫画やアニメのストーリーを琵琶やギターを弾きながら語る。しかし誰もがそのようにデフォルメされた江戸時代に満足しているわけではない。(198頁)

このような、擬似鎖国状態の中で国民の生活も一つ前の時代に無情に引き戻された。一度は得た電気のある快適な現代生活が、電気のない昔の時代に戻された。このように、再現された前代の生活はレトロで懐かしい雰囲気味わわせるが、もしわれわれがそのような生活にもどるのであれば、どのような日々を送っていくのであろう。このように学習者に問いを投げかける形で、授業を進め、学習

者の問題意識をかき立てていく。

さらに、授業の進行につれて気づいた問題点がある。たとえば、「夢幻能」という言葉について、どのように説明すればよいかという問題である。死者の幽霊が出る能劇のことというように辞書的な意味は説明できたが、一つの文化的コードとして、どこまでその背景の説明ができたかには疑問が残る。実際に使える時間も考慮に入ればならず、このような文化的背景を含んだ語の説明は、指導者の力量が問われるものと思われる。

## 五、学習者による感想文

本文を精読した後、学習者にグループわけをさせ、そのグループごとに討論を行い、口頭発表をしてもらう。それを踏まえて、授業後に感想を書かせ、提出してもらった。多くの学習者が「台湾と日本の社会問題」や「政治・メディア環境」などに触れて感想を述べた。その際出された感想文には、虚構の小説によって喚起された学習者の思索がみられる。その感想文についての指示は次の通りである。

### 指示

気になった箇所を本文から引き、それを写してから、自分の感想を

書く。(一五〇字程度)

感想文1 学生A

本文：二〇一五年、日本からの情報が途絶えて、日本に関する噂や神話が蛆のようにわいて、蛆は成長して蠅になって世界を飛び回っている。(191頁)

感想文1 マスコミは中立で不特定の大衆にいろいろな情報を忠実に伝達する団体です。(中略)台湾のマスコミの立場は複雑ですので、情報を操作することがよくあります。が、国々のマスコミも、色々な理由と目的で情報を流れています。利用されないように、自分で情報を集めて、信用できるかできないか、自分もよく考えた方がいいと思います。

感想文2 学生B

本文：二〇一五年、日本政府は民営化され、Zグループと名乗る一団が株を買って占めて政府を会社として運営し始めた。テレビ局も乗っ取られ、義務教育はなくなった。(194頁)

感想文2 一つの国の政府が、民営化になってしまふのは面白い発想だと思う。だが、資本主義が主流となっている今、財閥の政府への強い影響力があることは言うまでもない。(中略)真剣に考える

と、この国を支配するのはいったい政府か。それとも資本家か。民主主義は結局、われわれに見せた甘い夢にすぎないのか。

感想文3 学生C

本文：若いという形容詞に若さがあった時代は終わり、若いと言えば、立てない、歩けない、眼が見えない、ものがたべられない、しゃべれない、という意味になってしまった。(中略)若い人から順に姿を消していく。(197頁)

感想文3 文章の中で、放射性物質で、寿命が延ばされたが、実は現在の社会も同じなんだ。高齢化社会と低い出生率などの問題は日本も台湾もある。労働現況の悪化や、結婚の減少、高額な子供の養育費など、高齢化社会と低い出生率の原因である。ますます文章の論述と同じと思う。

感想文4 学生D

本文：納豆など、ピーナツが放射性物質のせいで短時間で変形したものではないかと疑われるかもしれない。(191頁)

感想文4 多和田さんは冗談のようにこう書いて、最初にこの段落を見たら、つい笑ってしまいました。しかし、よく考えたら、どの国でも、人々は先入観や偏見があったものです。場合によっては自分

や自分の国のレベルももっと高いと思って、そうして態度の差があります。このストーリーの背景もこの感じらしい。場合によっては知識と常識の不足のせいで、誤解が生じます。

感想文5 学生E

本文：それからしばらくして総理大臣はこの世から姿を消した。普通なら「暗殺」のニュースが流れるはずなのに、マスコミはなぜか「拉致」という言葉を使った。いったい誰が拉致したのか。(193～194頁)

感想文⇒日本は一見民主的な国家に見えるが、大きなトラブルがおこった場合、パニックを引き起こさないため、情報を隠すと聞いたことがある。この文から見ると、敏感な言葉も回避して、ほかの言葉を使ったのである。国民を騙して、嘘を言うのは独裁国家と同じではないだろうか。とは言え、台湾のメディアや情報もそんなに透明ではないと思う。近年に起こった「洪仲丘事件」<sup>註</sup>が思い出される。一人の命が大きなデモ活動になるなんて、国民の力をなめないほうが良いと思う。

このように、本文を精読した後で学習者に感想を書かせ提出してもらった。ここで紹介した感想文のほかにも、学習者は「高齢化の

社会問題」や「放射線汚染の問題」などに触れて感想を述べた。その感想文には、学習者の興味を引き立てられ、または問題意識をかき立てられた様子がみられる。また学習者の身の周りの出来事とあわせて考えているのも一つの特徴である。

学期の最後に学習者にアンケートを行い、今学期で読んだ小説のうちどれが一番好きで、どれがあまり好きではなかったかという質問をしたところ、次のような面白い結果となった。

一番好きな作品の一位は二作あって、「走れメロス」と「セメント樽の中の手紙」であった。三位は「不死の鳥」であった。

あまり好きではない作品の一位は、「走れメロス」で、二位は「鏡」、三位は「不死の鳥」であった。好きにせよ、好きではないにせよ、はっきり自分の好悪が言え、またその理由が述べられるようになるのは、大事なことだと思われる。

六、おわりに

「不死の鳥」を取り上げることで、文学は鑑賞の対象であるだけではなく、学習者に文化理解を促し、周りの環境や生活について考えさせるきっかけとなるものでもあることが分かる。さらに、学習意欲が高められたことも確認される。学習者の感想文からは、文学

に対する意識の変化も感じられる。その後の文学学習もなるべく身近に感じられるものを取り上げ、学習者に考えてもらおうように応用的に行っている。

このように、日本語教育の一環としてのこの授業では、学習者に日本語能力の五技能（聞く、話す、読む、書く、訳す）のうち、少なくとも読む、書く、訳すという三つの基礎能力を鍛えることに力を注いだ。そのほかにも、日本の文化・歴史・社会についての理解も深められたと思う。

二〇一八年度から選択科目になって一年目の現在、「日本小説選読」の履修者数は必修科目であったときに比べ、約二割減少した。今後、どのように学生に興味を持たせるか、選択科目であっても履修したいと思わせる科目の一つにしていくかは、指導者として今後努力していくべきことである。

高度な日本語能力を操る人にこそ、深い言語知識・異文化理解が問われるものと思われる。今後の日本と台湾のコミュニケーションを深めていく架け橋になる日本語学習者にとって、日本文学は欠かせないものと言えるであろう。

「文学無用」と言われることもあるが、このような人文学的知識を身につけることこそ、グローバル社会において異文化学習の重要な一環になり得ることを強調したい。

## 注

(1) 「東呉大学日本語文学科ホームページ」[http://web-ch.scu.edu.tw/japanese/jp\\_2018年2月10日閲覧](http://web-ch.scu.edu.tw/japanese/jp_2018年2月10日閲覧)

(2) 府川源一郎「文学教育の危機」『国文学解釈と鑑賞』一九九八年七月、12頁

(3) 「献灯使」をめぐって——『献灯使』著・多和田葉子

<https://gendaimedia.jp/articles/~40935> 二〇一八年十二月

一〇日閲覧

(4) 「洪仲丘事件」とは、二〇一三年七月に台湾の陸軍内で起きた下士官洪仲丘の突然死事件である。事件の発生した場所は陸軍内で、発生の経緯は不透明である。虐待致死の疑いがあったため、真相を公開するようにと当局に抗議する二回の大規模な抗議活動が行われた。

## テキスト

多和田葉子「不死の鳥」『献灯使』二〇一四年一〇月、講談社